



平成22年度春季講座 ‘歴史遺産と生きる’ 第 | 回 講演要旨

瑞泉寺の庭園と生きる

講師：瑞泉寺住職 大下一真さん

とき：平成22年5月8日(土) ところ：瑞泉寺客殿

◎瑞泉寺庭園の発掘調査

瑞泉寺は1327年に建ち、翌年にはもうこの庭があったという記録がある。

この庭はある時から埋まっていた、それを発掘復元したのが昭和44～45年、私の学生時分だった。

瑞泉寺の地は西からわずか北に開け富士山を望むが、先代の住職は「富士山からこっちはうちの庭」と言っていた。

当時の庭には小さい池があり、そこは夢窓国師の庭ということで県の文化財に指定されていた。貞享年間に水戸光圀が編んだ『新編鎌倉志』に絵が載っている。先代は今の庭はどうも違うのではないかと感じていたので、庭を一度発掘してみたいと思っていた。

庭は一度壊すと元に戻らないので、文化財の庭を発掘するのは大変なことだが、文化庁にも筋を通し、吉永義信先生監修で発掘にかかった。

石を除き掘り進め、鎌倉石の岩盤の形が出てきたら『新編鎌倉志』の絵のとおり、池も大きなものだった。絵はかなり正確だが、水分石みずわけいしも出てきた。それらは絵にはなかったものである。滝のためのダムも出たが、滝などの造りは元禄年間にはもうなくなっていたようだ。

次には、鎌倉石の岩盤で「これが庭か？」という点や、風化による剥落が問題になった。風化に対しては、ひび割れに人工樹脂を注入する補修で防ぐことにした。費用も相当掛かった。

◎へんかいいちらんてい 徧界一覽亭を含む瑞泉寺庭園

橋を渡り18曲りした後、山に登ると徧界一覽亭だが、これらも含めて瑞泉寺庭園であり、富士の眺めを借景に取り込んだ規模の大きな造園だ。

平成11年の開山忌650年の年には、徧界一覽亭も改修した。一覽亭からは江の島、箱根、富士と続く見事な眺めがあり、毎日水と道具を持ち登って行った大工からも文句の出ない環境である。

夢窓国師の庭の特色はスケールの大きさと、比叡山と嵐山を望む天龍寺庭園などが好例だ。先代は「夢窓国師の庭にはツボがある」と言っていた。

遠くでは、高知で作った、浦戸湾・市街・山並を



見渡す吸江庵の庭があり、近くは箱根堂ヶ島温泉対星館にある庵跡も、谷底の河原に面する環境が意外に広く、これらはチマチマしない大スケールの庭・立地の例だ。

◎自然体で管理する

何で庭を作るかという、訪れる人にホッとて貰えるからで、景色には人を癒す力がある。

環境を選んで寺を建てるのは、来る人の心を養い自らの心も養う。「ここに登ってくることは開山様の教えを自ら学ぶことで、跡を守る者は掃除だけをしている」と先代は申ししていた。

この掃除というのが、何千坪もある境内で大変だ。発掘後40年近く経つので、そろそろまた工事をもっている。18曲りも樹がうっそうとし過ぎているので、いま試みに手を入れている。

名勝管理者の集りに出ると内輪話で、人件費が高く、庭は金喰い虫という話になるが、ここは年間でひまをかけ整備しようと考えている。

瑞泉寺庭園は山の中、その管理は自然体で行こうと思っている。京都の庭のような精微な手の入れ方は考えていない。東京などでは、隣の建物が目に入ってくる時代だが、ここは有難いことにそうした心配がなく、世界遺産になって守られるのも有難いと思っている。

講演に引き続いて普段は公開されていない徧界一覽亭や足利基氏廟の特別拝観が行われ、参加者から「とても有意義な時間が持てた」と喜ばれました。



News! the 世界遺産

いざかまくら塾
第4回

「鎌倉の心 長崎の祈り」～世界遺産登録と市民活動～

6月6日(日)、鎌倉商工会議所地下ホールにおいて、いざかまくらトラストと鎌倉世界遺産登録推進協議会の共催で、世界文化遺産への登録をめざしている「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」についての講演と、長崎・鎌倉コラボのパネルディスカッションが開かれました。講演は、長崎県知事公室世界遺産登録推進室の日高真吾さんを講師にお迎えし、パネルディスカッションは伊藤正義・鶴見大学教授をコーディネーターに、日高さん、村田佳代子さん(画家・文筆家)、内海恒雄推進協議会広報部会長がパネリストとして参加し、鎌倉と長崎の市民が大切に護り伝えてきた文化遺産の価値をどのように世界に知ってもらうか、市民の役割等、活発な議論が行われました。

日高真吾さんの講演要旨



◎長崎とキリスト教

16世紀半ばに伝来したキリスト教は、その後の禁教政策によって、長く厳しい受難の時代に入ったが、幕末の元治2年(1865)、大浦天主堂に浦上の信徒数名が現れ、神父に信仰を告白した。いわゆる「信徒発見」である。250年の潜伏を経ての信徒復活の知らせは、宗教史上の奇跡といわれた。

そのような歴史を背景に、現在長崎のカソリック教会や信者数は、比率の上で他府県を圧倒している。

◎長崎の教会群とキリスト教関連遺産

世界遺産登録の対象となっている文化財は以下の通りである。キリスト教伝来当初の遺産として日野江城跡・ポルトガル伝来のカマボコ型墓碑・二十六聖人殉教地・原城跡など。キリシタン復活以降の文化財として、信徒発見の舞台となった国宝の大浦天主堂以下、離島を含めた県内各地に復活していった教会・天主堂・旧神学校・旧救助院・旧司教館などの施設や先駆的な福祉を行ったド・ロ神父遺跡などである。バッファゾーンである周囲の景観とともに、西欧とは異なる日本独自のキリスト教伝来と受容の歴史を示す希有な遺産であり、顕著な普遍的価値を持つ可能性は高いとして、平成19年、文化庁の世界遺産登録の暫定一覧表に掲載された。

◎現状と問題点

農漁業の不振などにより、教会を支える信者の減少、

高齢化が進んだ離島などの限界集落では、文化財の維持・管理も難しくなっている。

◎登録へ向けての組織

暫定一覧表に載ってから教育庁内の推進室から知事公室の世界遺産登録推進室に移管され、現在13名の組織となっている。また知事を中心にした登録推進本部、知事と首長による登録推進会議が設けられ、県議会の中には登録推進特別委員会が作られた。本年度中に世界遺産登録推進協議会を立ち上げる予定。民間では平成13年に、「長崎の教会群を世界遺産にする会」が設立された。他にNPO「世界遺産長崎チャーチトラスト」・NPO「長崎巡礼センター」などがある。また地域での取り組みとして、民泊、耕作放棄地での牧草栽培、学習田、ボランティアなどの活動があり、それらの活動を行政と連携しつつ効率的に運営する方向を目指している。

パネルディスカッションでの意見要旨 ※敬称略

村田:長崎の場合は、教会建築のみでは困難で、ド・ロ神父による文化の流入や遠藤周作の記念館の存在意



義など様々な角度で捉え、九州全体のキリスト教関連遺跡も踏まえ、精神文化を加えた推薦書にすることが望ましい。浦上天主堂の被爆のマリア像などは負

日高:キリシタン発見後もカソリックに復帰せずそのまま隠れとして信仰を守っている集落や隠れの聖地などがある。それも資産の重要な構成要素である。

内海:古都保存法制定の端緒となった御谷騒動や平和



都市宣言にみられるように、鎌倉の文化遺産は知識人などの市民の心によって守られ伝えられてきた。特にウォーナーの精神を継承する鎌倉同人会の果たした役割は大きい。市民の力で文化財を守ろうとする意識を長崎に学びたい。

伊藤:殉教や隠れキリシタンなどは世界史的に見ても



特殊で豊かなストーリーを構成する。文化財の概念や文化財も変化しつつ生き続けている。それを捉えるには新たなロジックが必要。地域の文化財を広く日本の文化財にするためには、地域を越えての市民運動に参画していく必要がある。